

萱方城跡(浅羽城跡)(坂戸市)

かやがた

鶴舞団地内の「城跡公園」/説明板のある辺りが本丸跡という



江戸時代には萱方村に属していたので萱方城とも言われているという

浅羽城跡（萱方城跡）

坂戸市鶴舞

浅羽城跡は中世に坂戸市西部を領した浅羽氏が、戦国時代に本拠を構えた所と伝わります。城の遺構はほとんど消滅してしまいましたが、団地造成前の地籍図や、福井県小浜市の酒井家文庫・広島市の浅野文庫などに残る絵図から、かつての姿が推測できます。それらによれば、ほぼ長方形の主郭を中心として、いくつかの曲輪がありました。主郭の南側には張出部があり、虎口（出入口）の守りをかためていたと思われます。なお、この案内板の立つ辺りがほぼ城の主郭にあると推定されます。昭和五八年度に埼玉県教育委員会が行った試掘調査では、溝・カワラケ・常滑の甕などが発見されており、地中には遺構が残っていることが確認されました。

浅羽氏は見玉党の一族で、入西資行の子行成（行業）を祖とします。北浅羽の万福寺にある県指定考古資料の板石塔婆は行成を供養するためにたてられたものです。しかし、浅羽氏の活躍を示す史料はほとんど残っており、詳しいことはわかっていません。天正一八年（一五九〇）に豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めた時、北条方に属したこの城も落城したと伝わりますが、事実かどうかはわかりません。

坂戸市教育委員会

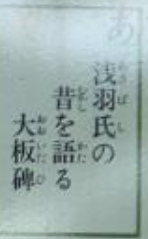
児玉党の一族有道資行は入西郡に居を構え入西氏(にっさいし)を称し、その子行成は浅羽氏と称したという



浅羽行成の弟である遠広は小代氏を名乗っているという(参考②参照)/また、浅羽氏の菩提寺の万福寺には行成の霊をとむらうための板碑が残されているという(参考①参照)/入西、浅羽の名称は現在も坂戸市の地名で残されている

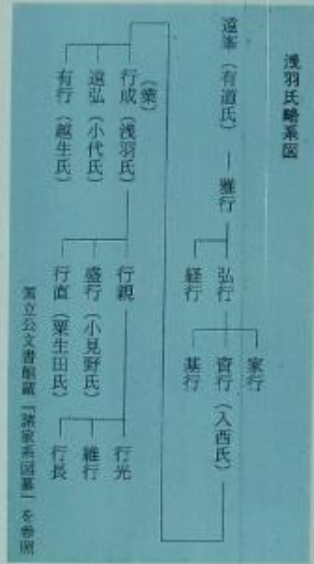


万福寺の板石塔婆 埼玉県指定文化財



万福寺の境内にあるおおきな板碑(板石塔婆)は、鎌倉時代に北浅羽を中心に活躍した浅羽氏が、祖先の小大夫行成の霊をとむらうために建立したものです。板碑に刻まれた文字は、浅羽氏を知る貴重な資料です。

板石塔婆は板碑とも呼ばれ、およそ鎌倉時代から戦国時代に、祖先の冥福を祈った追善供養や、自身の後生安楽を願う逆修のため、盛んに立てられました。初期の板碑は仏や菩薩の画像でしたが、仏を現す梵字などが刻まれるようになりました。万福寺の板碑は、鎌倉時代の徳治二年(一三〇七年)に僧の慧見が、祖先である



より浅羽一族を導いてほしいという願いが込められています。主尊のアーインク(梵字)は、真言宗の仏である大日如来を現しています。板碑は緑泥片岩で作られ、高さ二二二cm、幅八五cm、厚さ一四・六cmです。

浅羽氏は武蔵七党のひとつ児玉党武士団の一員で、板碑に刻まれている小大夫行成(行業とも書く)の時に「浅羽氏」を名乗っています。行成の弟に次郎大夫遠広(小代氏の祖)、新大夫有行(越生氏の祖)がいます。さらに、三郎行親(浅羽氏)、四郎盛行(小見野氏)、五郎行直(粟生田氏)の三人の子がありました。みな在地の地名を名字にしています。

このように、浅羽氏は北浅羽付近を本拠地にして、一族は北浅羽周辺や越辺川流域・越生あたりの入間郡北西部一帯(入西地域)に勢力をもった豪族でした。

坂戸市教育委員会



平成十九年三月

埼玉県指定
考古資料

万福寺の板石塔婆

坂戸市大字北浅羽一九三番地
昭和四十年三月十六日指定

この板石塔婆は、高さ二・二メートル、幅〇・八メートルの緑泥片岩をもつてつくられており、中央上部の梵字は、大日如來の種子で、深く鋭く刻まれていて、全体として鎌倉時代の特徴を備えている。
銘文は、次のとおりである。

右為龔祖浅羽小太夫有道行成

朝臣其子孫等就彼故墳

七代末孫比丘

德治二年丁未 結制日

慧見幹縁於是

奉造立也伏願菩提樹茂

近蔭後昆本覺月朗遠照幽冥也



右を書き下し文にすれば
右は龔祖浅羽小太夫有道行成朝臣と其の子孫等の為に、彼の故墳に就いて、七代の末孫比丘慧見幹縁ここにこれを造立奉る也、伏して願わくは菩提樹茂りて、近くは後昆を蔭い本覺月朗にして遠く幽冥を照さんかな

德治二年丁未年四月十六日

この銘文によれば、武蔵七党の一、児玉党有道氏から出た浅羽小太夫行成らの菩提をとむらうために、その七代の孫の比丘慧見が德治二年(三三七年)に建立したものである。

行成は、武蔵七党系図中の浅羽行業と同一人と考えられ、その実在を証するものとして貴重な資料である。

昭和五十一年十二月一日

埼玉県教育委員会
坂戸市教育委員会

1307年造立の板石塔婆(板碑)





公園全体を眺める





公園の端から周辺を眺める





浅羽城北東側に広がる田園地帯/昭和30年代の前半には、水田地帯の中に城跡として伝わるあたりが高まりを形成していて、北側の眺望が開けていたという



102 萱^{かや}方^{がた}城

種別	城（平城）
所在地	入間郡坂戸町浅羽宮裏
交通の便	東武東上線坂戸町駅下車徒歩25分
土地所有者	私有地
立地・形態・面積	平地 不規則 不明
遺構	なし。
築造年代	不明
城主・居住者	不明
文献・絵図	新編武蔵風土記稿（公刊） 埼玉県史（公刊）浅羽附近古蹟（大徳子竜先生遺稿、吉川恒吉氏保管）
伝承・記録	浅羽下総守の居館という。北条氏没落後廃城となる。浅羽氏は児玉党の所属で、吾妻鏡に行業、行親、行光の名が見え、関東古戦録にも浅羽甚内・成友兄弟の活躍が記されている。この甚内兄弟は下総守の一族であると思われる。浅羽氏は代々萱方城を居館としたのであろうか。



101. 大塚屋敷

102. 萱方城

参考②

小代氏館跡にある四代目小代重俊の供養塔



埼玉県
指定文化財

弘安四年銘板石塔婆

右奉為 前右金吾禪門一列諸衆合力建立也
夫聖靈者撫民之德惟深仁惠之情敦□因茲結
面々慕從之好友修月々忌景之諸衆等□令□
廬之廟石永宛滅罪生善之靈□以祈光□之
覺位以及累代之幽魂□□等濟幽顯同利之矣
干時 弘安四年辛巳七月一日 諸衆等敬白

高さ 二・二三メートル
幅 五九センチメートル
厚さ 六センチメートル
石材 緑泥片岩
*もとは高坂台地の北端大
日山(現折本緑地)辺りにあ
つたと伝えられています。

この銘文には、小代氏四代目重俊(右金吾禪門とは右衛門尉の唐名で重俊のこと)の仁徳を慕って、また祖先の供養のため、縁ある小代一族関係者が力を合わせてこの板碑を建立したことが記されています。この板石塔婆が建てられた弘安四年(一二八二)は、蒙古襲来(弘安の役)の年で、一族の武運長久と団結を願う意味もこめられていると考えられています。

小代氏は、武藏七党(横山、猪俣、野与、村山、西、児玉、丹党)の児玉党の入西資行の次男遠弘が、小代郷に住して小代を名乗ったことに始まります。

子息重康の「玉治合戦」での活躍により、重俊は宝治元年(一二四七)鎌倉幕府から肥後国野原荘(現熊本県荒尾市)の地頭職に任ぜられています。当時はその地に赴かず、地頭代に所領の管理を任せていましたが、文永八年(一一七一)幕府から蒙古襲来に備えるため、また、領内の争いを治めるため重俊の子息等は野原荘へ行くことを命ぜられ、小代氏一族は野原荘へと移り住んでいきます。その後、三百数十年にわたりその地で勢力を誇ったそうです。

小代氏の菩提寺となっている荒尾市の浄業寺には、一族の供養塔群が残されています。

平成一六年三月

埼玉県教育委員会
東松山市教育委員会

文化財を大切にしましょう

1281年造立の板石塔婆(板碑)



それぞれの位置関係

小代重俊供養塔



万福寺→

↑
萱方城跡(浅羽城跡)

参考ホームページ

<http://www.geocities.jp/tsukavan0112/subdir-siropage/asabaiou.html>

<http://homepage3.nifty.com/azusa/saitama/sakadosi.htm>

<http://www.geocities.jp/boatfisherman832/page045.html>

